

小学校で 出前授業を受講

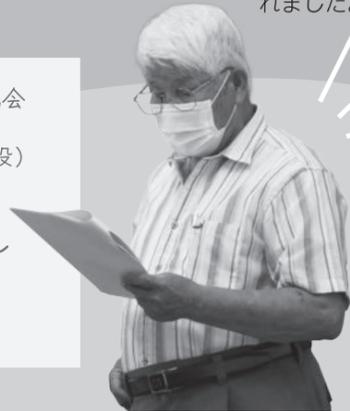
資源循環型農業について学ぶため、椎田小学校5年生の授業に参加。小学生たちは真剣に農家さんの話を聞き、田んぼの水の管理方法や、稲刈りをするタイミングはいつ判断するのかなど、こちらがハッとさせられるような鋭い質問をいくつもしていました。

私たちが学んだのは、「人工的に作られた化学肥料と違い、生き物の働きで作る有機肥料は循環する」ということ。そこから私たちの普段の生活が大事な資源の一部になるのだと気付かされました。

築上町有機液肥利用者協議会
学校給食部会長
(有限会社田中農産代表取締役)

たなか ゆうすけ
田中 祐輔さん

・築上町内の小・中学校の
給食のお米を作っています



Q. 小学生と一緒に授業を聞いてみて、どうでしたか？



実際に液肥を使用している農家さんの生の声を聞くことができました。環境問題について初めて考えるであろう小学生の時に、同じ町に住む身近な大人の取組みを体感できる、貴重な経験だと感じました。

液肥を撒いた 田んぼで田植え体験

「はい、一歩下がって」の声で後ろへ下がり、稲を植える小学生たち。私たちは液肥を使用した牛の飼料として使われるイネの田植えをお手伝いしました。田植えをしてくれたのは、町内の小・中学校の給食用のお米も作っている農家の田中さん。田んぼの両端から印付きのひもを持ち、小学生たちが植える目印にします。手作業で植える大変さを体感しました。

こうしたイネの他に、レタス、スイートコーン、大豆などの作物を液肥で育てている農家さんもいるそうです。



築上町役場産業課
おおた みか
太田 美加さん

・大学在学中に液肥の研究を行い、現在は下田さんと二人三脚で資源循環型農業の魅力を広めています

Q. 資源循環型農業の一連の流れを学んで、どうでしたか？



自分の体から出たし尿を再利用して食物を作る循環。私たち人間が原始的に行ってきた方法であり、資源枯渇が叫ばれる現代社会だからこそ、有効活用すべき方法だと感じました。

協力隊が発見！

日本有数の
農業方法

どのような仕組みか、正しく学ぶことから

築上町の資源循環型農業は、実は世界中、特に発展途上国からも注目される最先端の技術！その仕組みを知れば知るほど、私たちの生活と農業が密接に関わっているのだと実感します。

液肥センターの見学

液肥センター内では、パイプの中へし尿が流れ込む大きな音が響いています。液肥に必要なゴミを取り除き、酒カス由来の発酵促進剤を追加。約28日間発酵を続け、し尿は発酵熱により大腸菌などが滅菌され安全な液肥となります。その後は専用のバキューム車に積み、田んぼや畑に運ばれていきます。

築上町役場産業課

しもだ だいごろう

下田 大吾郎さん

・液肥センターの管理者
センターの管理や液肥の散布を行っています



食べる

液肥を作る

肥料

地域おこし協力隊通信 特別号

資源循環型農業を 学ぶ！

今回の地域おこし協力隊通信は『資源循環型農業』を特集。

『資源循環型農業』とは、し尿を液体の肥料にし、田畑に還元するという築上町ならではの環境にやさしく、持続可能な取組みです。実際に現場で学んできました！

農作物を育てる

液肥を使う

米

液肥の バキューム車と遭遇

液肥は専用の散布車やバキューム車で畑や田んぼに撒かれます。私たちが見学した時は、液肥と水を田んぼの水路から一緒に流し込み、これを数回に分けて行っていました。

一反*の田んぼの流し込みだと、1回で約2.5トン入れるそうです。ただ流し込むだけだと思っていたのですが、全体に行き渡るように田んぼの両端から入れ始め、終わるまで見続けていなければならないそう。「田んぼの大きさや水量に合わせて入れないと、水より重い液肥は途中で沈んで、偏ってしまうんだよね」と聞き、技術と経験を要する作業だと感じました。

*一反=椎田体育館くらいの広さ

Q. 液肥を流し込む場面を見て、どうでしたか？



おまたっち

機械を使って徐々に散布するイメージでしたが、田んぼに水が張られている状態から、物凄い量の液肥を流し込む場合もあり驚きました。また、ニオイは発酵によってし尿とはまったく違ったニオイになっており、流し込みの際は気になりませんでした。



追肥はバキューム車で流し込みます

液肥についてもっと知りたい！学んでみたい！
実際に液肥を使ってみたい！

お気軽に **築上町役場 産業課** まで
お問い合わせください



シヤンシヤン米 “環”

液肥で育てられたお米もぜひ食べてみてくださいね

→メタセの社で販売中！